日本IT書紀

064 真珠湾の次

04 含牙篇
巻之八 重濁

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第六十四

真珠湾の次

一

太平洋戦線でアメリカ軍は、第六十七節で紹介するランチェスター戦略モデルを忠実に実践した。戦争初期に採用したのは戦略モデルのうち「弱者の戦い方」だった。つまり局地戦にしぼり、兵力の分散を避け、一点集中の戦略を練った。

太平洋は広大で、小さな島が無数に散在している。

その中に戦略的な重要拠点となる島があった。真珠湾で太平洋艦隊の戦力を半減させられたアメリカ軍は、戦略拠点を絞り込み、その他の島は日本軍のなすがままにまかせた。

もうちょっと視野を広げると、大局的な戦略のベースにはレインボー計画があった。そのうちの第五プラン（レインボー5）では、ヨーロッパの対ナチス・ドイツ戦線を優先することになっていた。中国よりイギリス、フランスとの同盟関係の方がプライオリティが高かった。

そのために、対日包囲網の実質的な主体はイギリスとオランダということになった。合衆国艦隊司令長官（兼海軍作戦部長）アーネスト・キングは太平洋艦隊長官チェスター・ニミッツに、

――ＡＢＤＡ部隊には、全滅するまでに少しでも日本軍の進撃速度を遅らせることを期待する。

と語ったと伝えられる。

アジアはイギリス、オランダに任せる、というのである。

そうせざるを得なかったのが実際だったが、ランチェスター戦略モデルという支えがなければ、アメリカ政府はアジアの戦いに引き込まれ、戦争初期に戦意を喪失していたかもしれない。

日本は、緒戦の連勝に酔っていた。東条英機はラジオで

「皇軍は各地に転戦、連戦連勝、まことにご同慶の至りであります」

と語り、

「ご同慶の至り」

が流行語になった。

ところが実態はというと、開戦早々から日本軍では物資の生産・調達と輸送、つまり補給の問題が生じていた。これがために、戦争の長期化によって、戦略と戦術を大幅に修正せざるを得なくなった。

そもそもこの戦争は、鉱物資源や工業生産力の限界を打開するために、日本が全身をハリネズミのようにして始めた戦いだったから、戦争は短期間に終結させなければならなかった。

一九四〇年七月、陸軍航空総監（兼陸軍航空本部長）に就任した山下奉文は、遣独視察団の団長としてナチス・ドイツを視察してレーダーや暗号生成装置、パンチカード式集計分類計算機械の重要性に気がついた。メッサーシュミット社を訪問したとき。部品管理にパンチカード式計算機を使っているのを見た話はすでに書いた。

帰国後に彼は、近代戦争は軍事力より産業力、技術力が決め手になるという報告書を首相・東条に提出した。しかし東条は山下を二・二六青年将校の一派と疎んじていたこともあって、新京（長春）に追いやってしまった。

山下は独断で日本ワットソン統計会計機械にパンチカード式計算機械装置を発注していたが、アメリカ合衆国政府が対日輸出規制（道義的対日禁輸）をかけていたために、それは実現することがなかった。

連合艦隊司令長官・山本五十六もアメリカの工業力、特に自動車産業を重視した。それゆえに対米戦争は回避するのが善策、避けられないとしてもできるだけ先延ばしにするのが次善の策と考えていた。

しかし彼は、その一方で「軍人は政治に口を挟むべきではない」と頑なに信じていた。軍人としての美学を優先させた彼は、表立って対米開戦に異論を唱えることをしなかった。

開戦前の秘話として伝えられるのは、

――開戦することが決まったあとに開かれた大本営での会議で、山本五十六は「一両年は存分に戦ってお見せする。しかし、そのあとは保証しかねる」と言った

というエピソードである。

ときにそれは

――山本五十六は戦争に反対だった。

と解釈されるのだが、それは間違っている。

軍人であれば、戦争というものを否定することはない。戦うと決まったからには、いかに短時間に、いかに少ない犠牲で勝利を収めるかを考えるのが指揮官の仕事である。

山本がごく親しい友人に

「一気にアメリカ本土に兵を進めてはどうか」

と漏らしたのは、ジリ貧に陥ることを危惧したからだった。仮にアメリカ本土での戦いには敗れるにせよ、そこで講和交渉に入ることができる。この考え方は「強者の戦い方」の原則に合っている。

山本の構想は、「ミッドウェー海戦」と呼ばれる艦隊決

戦の延長線上にあった。一九四二年六月五日に行われたこの海戦は、太平洋戦争の趨勢を左右したとされる。すなわち連合艦隊は主力空母四隻を失って制海権を明け渡した。

それは紛れもない事実だが、南雲機動部隊の後に陸海軍の陸戦隊約五千人を乗せた輸送船団が連なっていたことはあまり知られていない。作戦の通りアメリカ太平洋艦隊を撃滅できていたら、連合艦隊はミッドウェー島に陸戦隊を上陸させ、ここをハワイ島攻略、さらにアメリカ本土空爆の起点とする計画だった。

二

現地時間一九四一年十二月七日午前七時五十二分、第一次攻撃隊指揮官・淵田美津雄坐乗機が発信した「ト・ト・ト」電で始まった真珠湾奇襲攻撃のあと、アメリカでは

――日本が上陸してくるかもしれない。

と真剣に心配した。

実際、日本軍はアメリカ本土攻撃を実行に移していた。

大本営が立案したアメリカ本土攻撃は、日米開戦直後、伊号潜水艦九隻による通商妨害（貨物船やタンカーを魚雷や搭載砲で破壊・沈没させる）に始まり、四二年二月二十三日、エルウッド製油所に砲撃が行われた。

その四日前（二月十九日）、オーストラリアのダーウィン港が空襲され、停泊していたアメリカとオーストラリアの艦船と商船が沈没・破壊されていた。

いつ、どこからやってくるか……

いやがおうにも不安が高まっていた。

二十四日の深夜二時過ぎ、陸軍基地のレーダーがロサンゼルスの西百二十マイル（二百キロ）の上空に、不審な飛行物体を検出した。

次いでロングビーチの上空に飛行機が目撃され、数分後、

――ロサンゼルス上空一万二千フィートに敵攻撃機二十五。

が報告された。

陸軍基地が警報を発し、灯火管制が敷かれ、迎撃のための戦闘機が準備され、砲撃が行われた。闇夜にサーチライトが交錯し、砲弾千四百発以上は射ち出された。射撃は午前四時過ぎまで続けられ、七時過ぎに灯火管制が解除された。

海軍長官フランクリン・ノックスは二十五日、

――不安から発生した誤報だろう。

と述べ、二十六日に陸軍参謀長ジョージ・マーシャルはルーズベルト大統領に

――当時活動していたアメリカの陸海軍航空機は存在せ

ず、関係した航空機は十五機に及ぶようだが、爆弾は全く落とされなかったし、未確認航空機は一機も撃墜されなかった。

と報告した。

のち「ロサンゼルスの戦い」と称される。

この冗談のような怯えぶりを知ったなら、山本五十六は

――もっと早く上陸作戦を決行しておけばよかった。

と口惜しんだかもしれない。

西海岸の防衛陣が水平線の向こうに双眼鏡を向けて目を凝らしていたころ、ホノルルでは

「二月十一日に日本軍がハワイに上陸する」

という憶測が、まことしやかに流れていた。

二月十一日と具体的だったのは、それが日本の「紀元節」に当たっていたためである。何かの記念日に日本軍が行動を起こすのは周知の事実だった。

判明しているだけで十二月十七日、年が明けた一月五日と日本軍の偵察機がオアフ島上空に飛来して偵察を行っていたので、ハワイ駐留軍は日本軍の動きに最大限の注意を払っていた。ばかりでなく、ハワイ在住の日系人をアメリカ本土西海岸の収容所に隔離するようなこともした。

内乱を怖れたのである。

四二年の二月十一日は何ごともなく過ぎたが、アメリカ政府と軍関係者が恐れた憶測は、半ば当たっていた。連合艦隊は第二次ハワイ攻撃を計画し、実行に移していた。

その計画は「K作戦」といった。

数度の偵察で、連合艦隊はアメリカ軍が真珠湾に着底した艦船を引き揚げ、破壊された港湾施設を修理しているのを知った。灯火管制もかけず大車輪で取り組んでいたので、あと二か月もしたら軍港として再生するかもしれない。

そこで航空母艦に搭載した複葉式の九六式艦上攻撃機をもって、アメリカ軍の陸上基地を破壊し、港湾の修復工事に打撃を与え、沈没したままのアメリカ海軍艦船を修理不能なまでに壊滅させるという計画が作られた。

九六式艦上攻撃機は本体が布張りで最高速度は三百キロという時代遅れの戦闘機である。であればこそレーダーに補足され難いのだが、航続距離を考えるとハワイ近海まで空母を動員しなければならなかった。空母はいずれの決戦に備えて温存したいし、九六式艦攻は対空砲火に狙われやすい。

そこで使用する航空機は、海上で発進できる水上飛行艇がいい、ということになった。マーシャル群島ウォッジェ環礁から発艦させるのだが、用意できたのは二機の二式大艇だった。搭載できる爆弾は一機当たり二百五十キロでし

かない。
　四一年十二月八日に連合艦隊が投入した航空機は三百機超、空母六隻、戦艦・重巡洋艦・駆逐艦など十四、特殊潜航艇五だった。これに比べ、「第二次」といいながら二式大艇がたった二機というのは、
　――偵察のついで
に過ぎない。
　言葉だけが大げさになり、実態は情けないほどの作戦だった。
　この〝攻撃〟は折からの悪天候に阻まれた。
　厚い雲が低く垂れ込めていたため、飛び立った二機の飛行艇は目標を捕捉することができなかった。ドゥリットル部隊のように上空五百メートルまで高度を下げなかったのは、搭乗員たちの士気が後ろ向きになっていたことと、帰還して報告することが義務付けられていたためである。
　――この天候では爆撃は無理。
　と判断した二機は、帰還のために急いで爆弾を投下した。
　一発はハワイ諸島モロカイ島付近の海上に落ちて巨大な瀑布を生んだが、人の眼に触れることがなかった。もう一発はマウイ島の人家近くに落下して火災を起こした。
　伸るか反るかの大博打に打って出た以上とことんやるほかないのだが、慎重に過ぎるのは及び腰という表現が似合っている。

三

　日本軍の第二次ハワイ爆撃と本土砲撃は、せいぜい東京初空襲への腹いせという程度で、戦略的な意味はほとんどなかった。
　――なぜ失敗に終わったか。
　が海軍作戦本部で検討された。
　結論は
　――航空母艦の出撃が制約されたためである。
　だった。
　――しからばハワイ諸島を射程距離に置くどこか島の上に海軍の航空基地を持てばいいではないか。
　――ミッドウェー島はどうか。
　という意見が出た。
　なぜミッドウェーだったか。
　それは、十六機のB―25による東京初空襲（四月十八日）に遠因があった。ドゥリットル部隊を載せた空母はサンフランシスコ港から出たのだが、大本営は
　――彼らはミッドウェー方面海域から発進した。
と推測した。本国西海岸から太平洋を横断して攻めてくる

とは考えもしなかった。
このため
――ミッドウェーを抑えれば、アメリカ艦隊を封じ込めることができる。
と考えた。
加えて東京初空襲の仇討ちという意味も込められていた。
かねて海軍は「積極的敵艦隊殲滅論」を主張し、陸軍に連携作戦の発動を求めていた。ミッドウェー諸島はアリューシャン列島とハワイ諸島の中間にあって、ここを抑えることは、ハワイ攻略を目指す海軍、北辺防衛の強化を指向する陸軍の双方に利があった。以上のことから、海軍の構想はにわかに具体的な作戦に転換した。
一方、アメリカ合衆国政府と太平洋方面軍は、暗号の解読でこの事実をつかんでおおいに焦った。それで彼らは、必ずや日本軍のハワイ上陸作戦が実行されるであろうことを確信した。だが、太平洋艦隊の艦船は広大な太平洋に散開し、それぞれの局面で対峙する日本軍との戦いに疲労を重ねていた。
ワシントンの海軍省作戦部は
――日本軍はハワイを真っ直ぐ目指してくる。
と判断していたが、太平洋艦隊司令長官であり太平洋作戦地域司令官のニミッツ（海軍大将）は
――自分が山本の立場だったらどうするか。
と考えていた。
ニミッツが考えたのは、
――ハワイが射程に入る島に恒久的な飛行場を建設する。
ということだった。
そうすれば艦船の被害を気にすることなく、いつでも攻撃機を出撃させることができる。
この時点でハワイの太平洋艦隊司令部情報部は、ウェーキ島で回収された日本海軍の暗号表をもとに、日本軍の暗号解読作業を進めていた。
五月に入ってのことだったが、情報部に勤務していたジョセフ・ロシュフォートという中佐が、日本軍の電信の中に「ＡＦ」という符号がしきりに入るようになったことに気がついた。
――ＡＦは日本軍の次の作戦目標ではないか。
と考えたロシュフォートは、ニミッツの思惑を受けて
――ミッドウェー島の蒸留施設が故障している。
という無電を、わざと平文で打った。
すると日本軍の電文に
――ＡＦは目下飲料水の欠乏に悩んでいる。
という連絡電が登場した。これで「ＡＦ」がミッドウェーを意味していることが判明した。

この話には異説があって、というのはこの時点でアメリカ軍は日本軍の暗号はあらかた解読できていた。「ＡＦ」が日本海軍の次の攻撃目標ということは分かっていたので、条件に合わない軍事拠点を消し込んで「ＡＦ＝ミッドウェー」を割り出した、という。

ともあれ五月十五日、ニミッツは太平洋に展開している空母に、ハワイに大至急で帰還するよう命令を出した。主力の「ホーネット」と「エンタープライズ」が真珠湾に入ったのは同月二十六日、サンゴ海海戦で大破した「ヨークタウン」が帰還したのは翌二十七日である。

「ホーネット」と「エンタープライズ」には、新しい戦闘機、艦上爆撃機が積み込まれ、新たな搭乗員とたっぷりの食糧が補充された。大破した「ヨークタウン」はただちにドライドックに入ったが、このときアメリカ海軍の機械力がいかんなく発揮された。

一千四百人の作業員が徹夜の作業に取りかかった。かくして三隻の空母は五月二十八、二十九日に相次いでミッドウェーに向けて出撃して行った。「ヨークタウン」には一千四百人の作業員がそのまま乗り組み、航海しながら修理が進められた。

アメリカ太平洋艦隊の兵力は空母三、重巡洋艦七、軽巡洋艦一、駆逐艦十七、艦船搭載の砲門百四十、艦載機二百三十三機、ミッドウェー基地航空隊保有機百二十一機である。

ほぼ時期を同じくして日本海軍も行動を起こしていた。

5月

26日　空母「龍驤」「隼鷹」（第四航空戦隊）が大湊湾を出港。

27日　空母「赤城」「加賀」「飛龍」「蒼龍」（第一機動部隊）が広島湾を出港。

28日　陸戦隊船団がサイパン港を出港。

29日　攻略部隊本部が広島港を出港。

同日　戦艦「大和」が呉港を出港。

山本五十六が立てた作戦は次のようだった。

一、まず第四航空戦隊はアリューシャン列島ダッチハーバーのアメリカ軍基地を叩く。これによりミッドウェーへのアメリカ軍支援を遮断する。

二、次に南雲中将率いる第一機動部隊がミッドウェー島のアメリカ軍基地を攻撃し、ここに陸戦隊を上陸させて占領する。

三、旗艦「大和」以下の砲艦は後方に控え、アメリカ太

平洋艦隊主力と正面で対峙し、艦隊決戦を挑む。
四、さらに陸戦部隊をハワイに運び、艦砲射撃ののち陸上戦に持ち込んでこれを占領する。
五、しかるのち連合艦隊主力はトラック島に再び集結してフィジー、サモア、ニューカレドニアといった諸島を陥す。
六、精鋭の機動部隊はオーストラリアのシドニーを空襲、連合国軍に壊滅的な打撃を与える。
七、これを受けて連合艦隊は再びハワイを攻略・占領して、アメリカ西海岸の空襲を目指す。

太平洋戦争が第二段階に入ったことを意味していた。これが成就すれば、対米英戦の勝機もしくは、日本にとって有利な条件での和平交渉が見えてくるであろう。実際に血を流すことも人が死ぬこともないシミュレーション・ゲームや空想小説では稀にそのようなストーリーが描かれることがある。だが本編の中では、いま現在、多くの人々が傷つき命を落としている。

第二次大戦が終了したあと、アメリカ合衆国の海軍大学はミッドウェー海戦をしばしば教習の素材に使った。自国海軍が大勝利をあげたというだけでなく、これ以外、後にも先にも教習の素材に相応しい実戦がなかった。

その結果、彼らは

――空母の数、航空機の性能、搭乗員の戦闘経験においては、日本軍側が有利だった。

と分析した。

対してアメリカ海軍は、

――情報、奇襲、相対的な位置、空母の作戦使用技術、レーダー、自動無線帰投装置、基地航空隊などにおいて優位だった。

と指摘している。

山本五十六の思惑通りにコトが進んでいれば、太平洋戦争の帰趨は大きく変わっていたはずである。だがアメリカ太平洋艦隊は日本の連合艦隊を待ち受ける立場にあった。作戦を立てる時間は十分にあった。

～～～～　補　注　～～～～

アーネスト・キング　Ernest Joseph King／1878～1956。第二次大戦中、アメリカ合衆国海軍の制服組トップだった。一九四四年十二月元帥となり、対日戦略では航空兵力と海軍艦隊で日本本土とインドシナ～フィリピン～インドネシアの補給路を遮断する作戦を立てた。

ABDA部隊　アメリカ（America：A）、イギリス（British：B）、オランダ（Dutch：D）、オーストラリア（Australia：A）のアルファベット頭文字に由来する。対日多国軍で、総司令長官はイギリス軍駐インド軍司令官アーチボルド・ウェーヴェル大将だった。緒戦でイギリス東洋艦隊とフィリピンのアメリカ軍が消滅してしまったため、四二年二月、イギリスのチャーチル首相の判断で解散した。これに代わるものとして南西太平洋方面軍が編成され、ダグラス・マッカーサーが指揮官となった。

遣独視察団　一九四〇年十月から四一年四月にかけて陸軍が指揮官や技官を派遣しナチス・ドイツの新兵器や新用兵を学んだ。同時期に海軍も同様な視察団を別途派遣している。

真珠湾奇襲攻撃　「ト・ト・ト」電が発信されたのは日本時間は十二月八日午前三時二十二分だった。コタバル上陸の二時間後だったが、連合国側に情報を秘匿するため陸軍と海軍は交信していなかった。日付変更線の関係でハワイ攻撃は宣戦布告日の「前日」となった。

オーストラリアへの空襲　一九四二年二月十九日、日本の機動部隊がダーウィンを攻撃した。第一次攻撃隊は空母から発進した零戦十八機、艦上攻撃機七十三機、第二次攻撃隊はセレベス島などの航空基地から双発爆撃機五十四機による空襲で、全くの不意打ちだった。このためダーウィンの軍事施設は大きな損害を受け、港に集結していた連合国軍艦船二十三隻すべてが沈没または壊滅的打撃を受けた。死者は民間人・軍人計二百四十三人だった。

エルウッド製油所　カリフォルニア州サンタバーバラの石油採掘・製油工場。伊―17潜水艦が艦砲射撃を行った。分厚い鉄鋼に当たって爆発する徹甲弾だったため、砲弾の多くは不発だった。

伊号潜水艦による米本土艦砲射撃　六月二十日のバンクーバー砲撃、同二十一日のフォート・スティーブンス陸軍基地砲撃である。また、アメリカ本土には四二年九月に零式艦上戦闘機が焼夷弾を抱えて出撃した。ただしアメリカ本土上空を飛んだのはただの一機だった。その零戦は翼を切って折りたためるように改良した偵察機タイプで、伊―25号潜水艦に搭載され、ロサンゼルス沖で飛び立った。上空からロサンゼルス市を撮影し、オレゴン州の山林に焼夷弾を落とした。

ロサンゼルスの戦い　ロサンゼルス・ヘラルド・エグゼミナー紙は、「目撃者は飛行機の数を五十機、三機が海上で撃墜された」と報じた。

フランクリン・ノックス　William Franklin Knox／1874～1944。一九三六年共和党副大統領候補だった。

第二次大戦中の在米日系移民　日本が宣戦を布告するのとほぼ同時に、まずカリフォルニア州在住の日系人が資産を没収されたうえ同州内十か所の収容所に隔離された。ハワイ在住の日系人はアメリカ本土西海岸の収容所に強制送還されるか、子息が海兵隊に志願して家族の生活を保障することになった。ヨーロッパ戦線に

おける日系人部隊の三分の二がハワイからの志願兵だった。こうした中からロバート・マツナガ上院議員やダニエル・イノウエ上院議員などが出た。

ウォッジェ環礁　陸地部分八平方キロメートルで、マーシャル諸島の中で最大規模の島とされる。第二次大戦中、ここには連合艦隊第四艦隊の陸戦部隊三千五百人が駐留していた。一九四四年一月三十日、アメリカ軍の爆撃と艦砲射撃で砲台が破壊され、餓死を含め二千九百人の死者を出した。

島上の海軍航空基地構想　いわゆる「不沈空母」構想。海軍参謀だった源田實が発案したとされる。太平洋の島々に海軍航空部隊を配備し、島を空母に見立てて適時作戦行動に援用するという考えで、これにより第一航空艦隊（一航艦）が編成された。艦船を保有しない艦隊で、事実上、空軍に近かった。

ジョセフ・ロシュフォート　Joseph Rochefort／１９００～１９７６。オハイオ州デイトンで生まれ、少年のころからクロスワードパズルを解くことに熱中した。一九一八年海軍に入り、二六年に新設された通信部門の暗号解読組織「ＯＰ―20―Ｇ」のチーフとなった。その後日本語教育を受けてハワイ基地に赴任し、大日本帝国海軍の暗号解読に当たった。

ダッチハーバー　アリューシャン列島のアラスカ寄りにある。アメリカ軍は日本軍によるアメリカ本土への空襲や上陸があるとすれば、中部太平洋→ハワイのルートか、アリューシャン列島→カナダ→アメリカ本土のルートと想定していた。中でもダッチハーバーは軍港として利用できる条件を整えていて、日米どちらにとっても確保しておきたい（ないし敵に利用されたくない）要所だった。

日本IT書紀　064 真珠湾の次

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。